

国際協力の  
最前線+α

3



## 妊産婦を守る環境づくりを 一歩ずつ

NGO「ジョイセフ」の  
後藤久美子さん



### Q NGOの活動について教えてください。

私が所属しているジョイセフは、「世界の妊産婦と、女性の命と健康を守る」ことを目的として活動しています。発展途上国の多くでは、妊産婦の死亡を減らすことが重要な課題の一つになっています。現在私が活動しているザンビアの場合、2018年の出生10万件あたりの妊産婦の死亡数が252人です。日本では3.5人ですから、72倍の割合で女性が亡くなっています。こうした状況の背景には、基本的な医療機材の不足や保健医療スタッフが少ないことに加えて、自宅からクリニックまでの「距離」が遠いという問題があります。農村地に住む妊産婦のなかには、数十キロの道のりを、徒歩または家族に支えられて自転車でクリニックに向かう人がいます。緊急時の搬送手段として救急車やタクシーなどの車が使えないことはほとんどなく、自宅での出産を選択する妊産婦が少なくありません。そこで私たちは、「ワンストップサービスサイト」とよぶ場所をつくり、安心して妊娠・出産ができるためのプロジェクトを開始しました。

### Q 「ワンストップサービスサイト」の取り組みについて具体的に教えてください。

ワンストップサービスサイトでは、村のクリニックを中心に妊産婦に必要な施設を建設しました。それは、出産予定日が近づいた妊婦が滞在する宿泊施設(マタニティハウス)、24時間体制で勤務する助産師たちの住居です。また、クリニックには妊婦以外の患者も訪れるので、プライバシーを保ち、より安心して出産できるように母子保健棟とよばれる施設をクリニックとは別につくりました。出産間近の妊婦たちは、ここへ来れば安心して出産することができます。地域の妊婦に情報や知識を伝えて、

ワンストップサービスサイトの利用を促す役割を担う保健ボランティアも養成しました。

また、10代での妊娠・出産が多いザンビアでは、予期しない妊娠を防ぐために、若者たちに正しい知識を持ってもらうことが必要です。けれども、性や妊娠・出産の仕組みに関することは相談しにくいという課題があります。そこで、思春期の若者がリーダーとなり、同世代の友達に知識を伝えるピア(仲間)・エドゥケーターを育成しています。また、ユースセンターという施設をワンストップサービスサイトに建設し、若者が自主的に活動できる場所もつくりました。

### Q 現在のお仕事につくまでの経緯や今後の展望について教えてください。

青年海外協力隊員としてガーナで2年間、エイズ対策の活動に携わったことがきっかけです。そのなかで多くのことを学びましたが、大事なことは現地の人と同じ目線にいることと、現地のニーズを知り、計画の段階から現地の人とともにつくり上げることだと思います。ずっと現地にいることができないため、日本の経験や技術が伝えられた時点で、現地の人に運営をバトンタッチするようにしています。ワンストップサービスサイトも、私たちの手を離れた後に多くの地域でつくりられ、広がってほしいと思います。



↑ ②ユースセンターで同世代に情報を提供する  
ピア・エドゥケーター(ザンビア、2019年)



③母子保健棟  
で生まれた子ども  
(ザンビア、  
2019年)



①出産前の期間をマタニティハウスで過ごす妊婦たち  
(ザンビア、2019年)